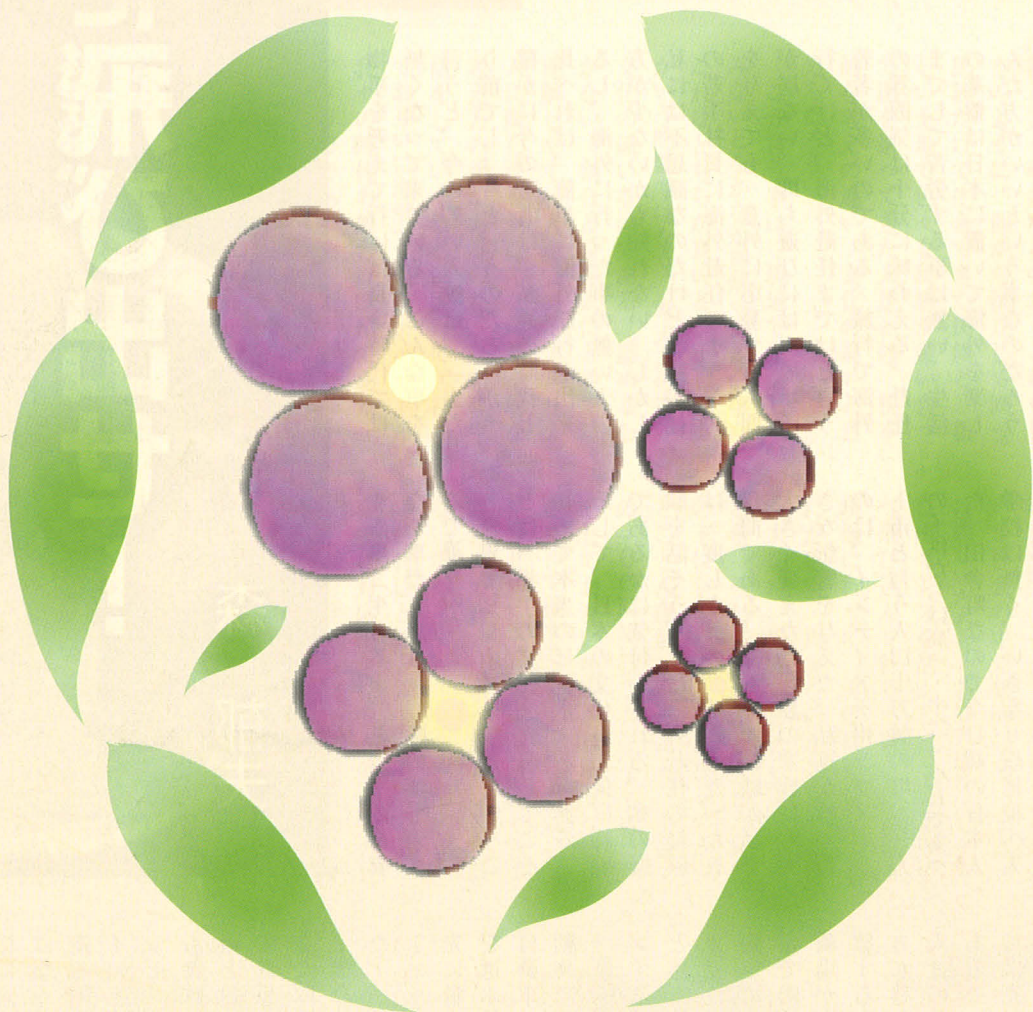


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2012年3月 NO.166



[もくじ]

- 2～3 世界に飛び出せ！…森郁夫
- 4～5 地元の人達も観光に来た雰囲気です…渡辺毅
- 6～7 南極観測隊同行日誌（上）…森岡美和
- 8～9 第7回美術作品コンクールの審査にあたって…五十嵐卓
- 10～11 言葉の現場から32「こころ」とヤマアラシジレンマ…広井護
- 12 鎮守の森は今 県内の神社めぐり体験記（二）…竹内荘市
- 13 高知市文化振興事業団 12月～2月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

世界に飛び出せ!

森 郁夫

高知を離れて四十五年になろうとしている。高校時代まで高知に暮らし、大学は東京に四年間、自動車会社に就職して群馬の工場に十八年。仕事の関係でアメリカ・インディアナ州に五年、帰国して本社・東京に十八年になる。

本社の仕事は主に海外営業が長かったので、色々な国を訪問したし、海外生産推進部を任された時は、海外生産を行っていたアメリカ、台湾、中国などに赴いた。今迄世界の経済を引っ張ってきたのは欧米や日本であったが、今世界の経済はBRICSによって支えられている(ブラジル・ロシア・インド・中国)。さらに次の時代はASEAN(東南アジア諸国連合)やアフリカに支えられる事になるだろう。即ちこれからは、日本の中だけで

物事を考えて行けば良い時代では無くなって来ている。こんな事を言うと、今の若い人達は、「当たり前でしょ」と言うのだろうか?

確かに今の若者は、私達の時代と比べれば、簡単に海外旅行が出来るし、海外に行った事の無い人の方が少ないかも知れない。しかし私には不思議なだけけど、我が社の若手社員に海外赴任のチャンスを与えても、意外に応募する人間が居ない。即ち遊びにはホイホイ行くけど、海外赴任まではと言う若者が多いのである。旅行で海外の雰囲気は十分に味わえる。赴任までして苦労する事は無い。生活の基盤は日本に置いて海外を楽しんだ方がいいという事なのだろう。しかし私の経験から、海外を訪問する事(見る事)と、海外で生活

する事(生きる事)とはまるで異なる事だと思ふ。経験の深さがまるで違うのだ。

世界でビジネスをするというところは、相手の文化を理解してこそ初めて本当のビジネスと言える。そして、日本の文化が如何に特殊であるかに気付かされる。私の経験を話そう。私は海外赴任の経験は一度しかない。それもたった五年間である。でもその経験が私を大きく変えたし、私の家族にも大きな影響を与えた。私達が行ったのは、インディアナ州ラファイエット市と言う人口十萬強の町、三人の子供たちは高一・中二・小五であった。田舎町なので全日制の日本人学校は無く、いきなり現地校へ入学した。驚いたのは現地校にESLと言う英語の話せない生徒の為

のクラスがあるという事。日本の様に同一民族であると言う前提ではなく、異なった民族が集まって造る国なのである。またシニアハリの生徒であった息子の授業にプレゼンテーションの授業が有るのも興味深かった。日本の阿吽の呼吸と違い、お互いが主張して初めて意思が通じる国として成長してきた故であろう。

また仕事上でも色々な発見があった。一番驚いたのはSeniority(先任権)と言う考え方。先に職に着いた人が、有利な職場を選ぶ権利が有ると言う仕組み。自動車の生産現場はだいたい二直勤務形態をとっており、日本では一直と二直が一週間にローテーションする。その方がお互いに公平だと誰もが考える。ところがアメリカでは、最初に入職した人が一直固定で、後から入った人は二直固定で働くのが当たり前。またある職場が空いた場合、その職場を希望する人のうち、入社が早い人の方が移る権利を有する。即ち全て入社の早い人が、先に選ぶ権利がある。これが先任権。彼等にとっては先任権に従って優先順位を決める事が公平である訳で、これも新大陸にフロンティア精神で国を造っ

てきた人達の常識・文化なのだ。もうひとつ、「他人の庭を掃く」という事。仕事の境界線は見落として掃くことによって、お互いカバーしながら抜けの無い様に仕事を進め、完全な物に仕上げろ、と言う意味。日本人にとっては解かり易い格言である。これを現地で実行しようとしたのだが、どうしても理解して貰えない。即ち日本人にとっては善意の干渉となるが、彼等にとってはこれは悪意の干渉になってしまっているのである。日本人にはサポート

なの、彼等には侵略、仕事を取ると言う事になるのだ。これも日本のように、他から孤立して同一民族だけで生きてきた民族と、新しい土地で色々な民族が競い合つて国を造ってきた人達との、根本的な考えの違い、文化の違いと言えるだろう。

こう言う事は、現地で生活してみないとなかなか理解できない事だ。これはどちらが良いとか正しいとかいう問題ではなく、考え方の違い、文化の違いなのである。認めるしかなない。割合と日本人にとっては理解しやすい人達であるアメリカ人に関しても、こんなに基本的な考え方の差があるのだ。一緒に生活をしていくことによって、初めてお互いに理解できていくのである。

我々の時代の舞台は欧州であり、アメリカであった訳だが、これからはもっと馴染みの薄い国々がビジネスの相手になってくる。中国は共産国家であることでの戸惑いが随分ある。ロシアもまたそうだが、またそれ以上に、宗教が異なることよっての、考え方や習慣の違いはもっともっと大きいだろう。イスラム教にしろ、ヒンズー教にしろ、我々の知らない事がそれこそ一杯ある筈だ。

しかしだからといって接触する事を避けていては、これからのグローバル社会の中で発展していくことは難しいだろう。若い人達には、色々なチャンスを活かして、世界の中へ飛び込んで行って欲しいと思う。現地に行つて、実際に経験し、なにが事実・真実なのかを知ることが大切だ。先ず「FACT」を知ること。そしてそれがどう言う背景の下に、そういう事になるのか、とことん理解し合うこと。本音での「COMMUNICATION」。そしてお互い相手を尊敬し、敬意をもって接する事が大切である「RESPECT」。相手が尊敬できてはじめて良い仕事が出来るのでないだろうか。

時代はどんどん変化している。変化に対応出来ないものは生き延びては行けない。坂本龍馬が世界を見ようと脱藩して行ったように、我々も日本という範疇から脱藩していかないと世界の流れから取り残されてしまう。しかしそれは日本人である事を辞めると言うことでは無い。日本人、土佐人は素晴らしい所を沢山もっている。その良さを保持しつつ、世界の中で活躍する人間になって欲しい。



スバル インプレッサ スポーツ 2.0 i Eye Sight

もり いくお

一九四七年 高知市生まれ
土佐高校、早稲田大学理工学部を卒業後、一九七〇年富士重工業株式会社入社。工場での生産管理部門を経て米国赴任、帰国後は主に海外営業部門を担当。営業本部長を経て、二〇〇六年代表取締役社長就任、二〇一一年代表取締役会長となる。



地元の人達も

観光に来た雰囲気です

渡辺 毅



「地元の人も龍馬が最後に帰郷した袂岩(たもといわ)、知らなかったね」「高知の自然の風景が素晴らしい。船から見ると桂浜・龍馬像がまた違って見えて良いですね!」と、県内外のご乗船していただいた皆さんの声。

まだまだ、知名度が低いのですが、高知市の中心地、九反田(堀川)から出発して浦戸湾や桂浜沖を巡る「高知市観光遊覧船事業」です。地域経済の活性化を第一目標に「NPO法人きらりこうち都市(まち)づくり」を立ち上げ今年で五年目。ようやく地元の方々にも(活動自体を)受け入れられるようになってきたと実感します。

よく「遊覧船をやるきっかけは?」と聞かれます。私は高知に生まれ、高知に育ち、高知で会社に勤め、というように、仕事にも恵まれました。が、仕事柄、地域の方々と

話をする機会が多く、「家(うち)の子供は、高知で働きたくても、働くところがない」「高知を離れ県外に行くしかない」等の声に、高知での就労先や求人倍率の低さが特に気になっていました。

この事業を始める五年前くらいだったでしょうか。もともと地域を元気にし、需要と供給のバランスも良くなり、求人も活発になる取り組みはないのか?と模索していました。「地元の企業・お店が繁盛すれば雇用が増える」では、繁盛するためにはどうするのか?と、時間が過ぎていきました。

ある時、ふとひらめいたのが遊覧船での観光でした。たまたま、私の趣味が磯釣り・船釣り、寒い冬だったと記憶しております。桂浜沖の遠くへ釣りに行った帰りの事です。船の先端に座って寄港している時に見た四国山地の雪化粧

になったのです。「運」は、まだまだ続きます。

つものハードルが表れ、気持ちとしては下降気味でした。この時でも思いましたが、人間希望は絶対捨ててはならないという事ですね。以前の仕事でもお世話になった、地元の黒潮マリン(竹崎社長)に相談したところ、全国のネットワークを使って「小豆島で海苔採取船があり、改造すれば遊覧船に使えるのでは!」と情報をもらいました。その船を手に入れることができたからこそ、平成十九年十月「NPO法人きらりこうち都市づくり」を立ち上げる事



大型遊覧船「ゆうがお」

平成二十年三月に運行開始と決め、同時期に「花・人・土佐であい博」も開幕。絶好のタイミングが事業の後押ししてくれました。そして、二十二年は、NHK大河ドラマ「龍馬伝」や「土佐・龍馬であい博」、二十三年は、「志国高知 龍馬ふるさと博」と、官民一体の取り組み事業に乗ることができ、今年で

青い海、青い空、その間に陸地(桂浜)がパノラマのスクリーンのように目の前に広がったのです。今でも目に焼き付いていて、その感動が消えません。これこそ「釣りの特権」と思った時、「じゃあ釣り人でなくても、誰でも船上から見られるようにすれば、きつと地元や県外から訪れた観光客の皆さんも、この土佐の風景に感動するはず!」とつながったのです。遊覧船事業への方向が定まった原点と言えるでしょう。

観光業界は、まったく考えていなかった分野。でも、県外の観光客の皆さんが、どんどん高知に訪れてくれば、地元にお金(外資)



「ゆうがお」に乗る筆者

設立五周年となりました。語りつくせないくらい、いろんな方々にお世話になり、そのお陰で昨年二月高知県地産物大賞の産業振興計画賞を受賞。皆さんと一緒に作り上げてきた結果だと自負しております。高知県民・県外の皆さん、旅行業界の皆さん、高知県・高知市の行政の皆さん、県・市議の皆さん、そして、産業振興計画(高知市)地域アクションプランでのご支援等々、皆さんのお力添えがあったからです。

土佐には磨けば良い素材がいっぱいあります。真っ白な紙に一本の線が引かれ、それが立体となって目に見えてきます。新しい事業を立ち上げるには、言葉に出せないくらい苦労と出会いと別れがありました。でも、どんな営利事業においても、どんなボランティア活動においても、安定した資金がなければ運営することはできないことも、この五年余りの時の中で感じてきました。しかし、これからは人との絆を大切に、県民の皆さんと共に誇れる事業にしていきたいと思えますので、どうぞよろしく願います。

が落ちる。観光業界が潤えば、そこに納めている一次産業など農林水産業を営む方たちの収益が上がる。そして、消費拡大に繋がりが商店や企業も潤う。速攻性をもった経済効果が期待できると、目指す方向がようやくはつきりとしてきたのです。船一隻あれば「お客様をもてなす」という事は、そんなに資金がいるわけでもなく、(おもてなしをしたお客様の)「気持ちの対価も、必ず地元が大きく返ってくるし、地域経済の活性化になると信じた。

私たちの力で、企業誘致はできるものでもないし、箱物を建てて施設を造る資金も無い。何も無い人間でも明日からできることは「おもてなし」の活動だったんですね。今、考えても、よく事業が実行できた仲間といつも話しています。船は知人の船・プレージャーボートを考えていましたが、島根県の松江城周囲を巡る堀川遊覧船を視察に行った時、先方の担当者が「雨が降れば(屋根が無ければ)お客様は乗らない!」など色々、お話を聞いていく中で、だんだんプレージャーボートじゃあ事業にならないと課題が出てきました。「さあ、どうするか?」と、目の前にいく



桂浜を望む「きらり1・2・3号」

わたなべ たけし

一九五八年 土佐清水市下の加江生まれ
県立農業大学校卒業後、県建設労働組合書記局在職中「現代の名工久保田騎志氏の土佐漆喰工法をさぐる」を映像企画・制作。一九八九年高知ケーブルテレビ入社。放送制作部部長を経て二〇一〇年六月退職。同七月NPO法人きらりこうち都市づくり専従役員に就任。二〇〇七年四月〜二〇一一年三月まで南国市広報委員会委員長。NPO法人きらりこうち都市(まち)づくり理事長。



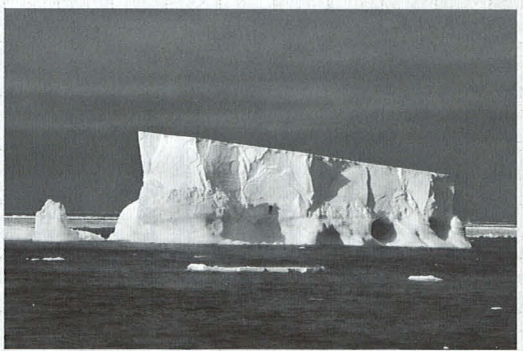
南極観測隊 同行日誌(上)

森岡 美和



白瀬^{のぶ}率いる探検隊が南極大陸に上陸してから百年が経つ。昨年は記念のTVドラマなども放映され、ご覧になった方も多かったことだろう。そのような折に私は南極への切符を手にした。南極地域観測隊に同行する教員派遣が始まって二年目のラッキーを引き当てたのだが、これは私が優秀であったからでもないし、ただ偶然に運が良かっただけでもない。長年南極地域の岩石研究をされている高知大の恩師を初め、様々な方のお力添えがあったことだと思っている。高知で生まれ、高知で育ち、高知で働き、井の中の蛙そのものでありながら、地球の南の果てでの活動に臨めたのは、そういう人と人との繋がりがあったからである。人の縁は不思議であり、有り難いものである。そもそも地学という学問に興味を持ったのは、高校に入学してからのことである。地球という星に関する不思議、我々はどこから来て、どう生きるのか。宇宙の中の地球、そして日本という国。こんなに小さい島国なのに、たまたま複数のプレート境界に位置し、火山・地震の巣窟である。こんなところで正直に律儀に生きている日本人。

そして何故かその日本人らしさが極地活動にまで表れている。良きにつけ、悪しきにつけ、その日本人気質はこの国を支配しているのである。先の大震災でもそれは顕著に表れた。我々がまだオーストラリアに帰り着かないうちに三・一一は起こった。断片的に届けられる情報の中で、被害状況が尋常でないことを知った。あらゆる混乱を想像しながら帰国したのだが、被災地の劣悪なる状況の中で人々が如何にそれを乗り切りつつあったか、。「絆」という言葉に代表される、皆さんご存じの経過である。そしてその人々を育む日本の地質は強烈なのである。しかも、プレートテクトニクスに関する研究のうち、「付加体」については、高知大学の地学研究室が中心となつて積み上げた地道な地質調査を基に確立されたのだ。高知の海岸沿いの地質は実にすばらしいのだが、学生当時はそれほどの思いを持たずにいた。ところが、卒業してからも地質の世界と縁遠からず、今回の室戸ジオパークの世界認定に向けても、多少なりとも応援させていただけたと思っている。さて、南極とは、一体どういう



青い層のある冰山

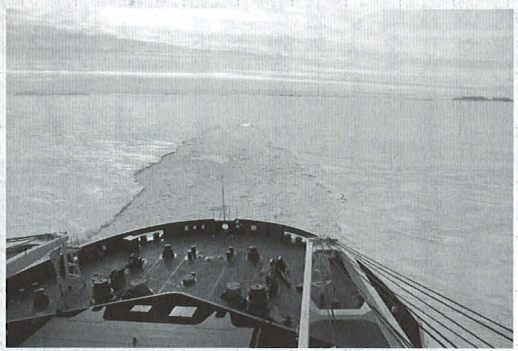
ところなのか。帰ってきてから、南極は如何でしたかと尋ねられることが少なくないのだが、一言でお答えするのはなかなか難しく、その時々相手の顔色等に感じて様々なお答えをさせていただいている。最も時間のない時の答えは「結構大変でした」である。何が大変なのかといえば、先ず長い船舶生活、そして南極の夏の建設事業である。他国は空輸が一般化している中、日本の南極観測隊は、現在も船を利用して年に一度の往復便を出している。海上自衛隊の「新しらせ」は、輸送力も抜群で、ディーゼル電気推進方式(交流)による迅速な前後進切り換えができるほか、

揺れも少ない砕氷艦である。二二五〇tの巨体で氷の上に乗る上げ、荷重でそれを砕きながら進むのだ。しかし、その優秀な「新しらせ」でさえも南極海の氷の厚さの前には苦難を強いられるのである。私の同行した五二次隊は、オーストラリアを出て昭和基地付近に着岸するまで、実に一ヶ月以上を要したのだ。何のことはない、海が凍ってさえないければ船は二週間もあれば基地に到達できるであろう所を、氷厚二〜三mになると一気に減速してしまい、一日数百mしか進めないなんてこともしょっちゅうで、ひどいときには全く動かないのだ。ちなみに今年の五三次はついに着

岸断念。三五次以来の一八年ぶり(昨年は一月一日着岸)。一事が万事そういった調子で、予測の立たない中での南極活動は、計画に計画を重ね、その計画の半分が実行できればよいと言われるのだが、どっこい、ここでも日本人らしさからか、八割以上こなしてしまう。私などは土佐人のはい、所があるせい、最初の内の計画は必要なかったのでは? もっと状況が確実になつてから計画すればよいなどと考えてしまうのだが、極地に挑む人たちは実にねばい。淡々と計画を塗り替へながら、時期を伺い、その時が到来すれば黙々とミッションをこなす。プロなのだ。

そしてそのプロはどういった面々かという、常時極地研究を目的として活動している国立極地研究所のメンバーの他、気象庁・大学等研究機関・通信会社・建設会社・海上保安庁・国土地理院・天文台・新聞社・病院など様々な職場から派遣されてきた、あるいは自営の仕事をやめて参加した約六〇名である。この多様な職種の人たちが、それぞれその年の極地ミッションを受けて各分野で活躍をする。簡単に言うと、基地を中心とした極域での気象(地上上空の気象・オ

ゾン分布・オーロラほか)・海洋(潮汐・海底地形ほか)等の長期短期観測を主とした活動とそれを継続するための建設活動、氷床ボーリングのためのドーム基地への移動とこれを支える雪上車や機材のメンテナンス、キャンプを張りながらの野外観測(岩石やペンギン・コケ類・微生物等南極の自然の観察・地図の作成)といった活動であり、この何れにも必要なのが食料・燃料の補給・情報通信・医療ということになる。特に五二次隊では、自然エネルギー棟の建設とパンジー計画といわれる宙空観測用の千本のアンテナ設立が柱になっていた。そのプロに混じって活動させてい



新しらせ

ただける教員派遣プログラムは、「新しらせ」の就航により乗員が増加したおかげで実現した。五二次で参加した教員は二名、もうひとりは北海道登別明日中等教育学校の男性教諭であった。我々の任務は「南極授業」を通じた、国内の小・中・高校の生徒および一般国民への南極に関する理解の向上のための情報発信である。「地方の学校と南極を結ぶ」という、何ともわくわくする事業であった。生徒たちに何を伝えるのか、南極でしか出来ない発信とは? が私たちにとつて当面の大きな課題であった。



オーロラ

もりおか みわ
一九六五年 旧東津野村生まれ
高知大学理学部地学科卒業後、
公立高等学校の理科教員。現在
高知小津高校在籍。一九九五年
地学を広く楽しんでもらおうと
「高知地学研究会」設立に関わ
り、現運営委員。二〇一〇年一
月〜二〇一一年三月まで第五
二次南極地域観測隊に同行。小
学校などで南極授業や講演も行っ
ている。

(次号に続く)

第7回美術作品

コンクールの審査にあたって 五十嵐 卓

昨年四月に、第7回美術作品コンクール「Concours de s Tableaux」の審査員委嘱を受け、即答で受諾したが、じわじわとその責任の重さを感じていた。出品者が渾身の力を込めて制作した作品をたった一人で公開審査・表彰しなければならぬが、審査員一人の目で渾身の力を込めて対決するしかないと思うに至った。

まず審査前日に、先入観なしの直感で作品を見て回り、作品の良し悪し、完成度、将来性などを吟味して作品を営めるように見つめてみた。続いて、今度は作家のプロフィールと制作意図を読みながら、作家の思いや作品コンセプトを理解し、作品を再検証した。さらに翌日、珈琲二杯を飲んで目を覚まして作品を見直してみた。この時点で、私の心の中では最優秀賞、優秀賞の候補者は決まっていた。

十四時からの公開審査では、事前に決めた順位を覆すほどの作家若い作家をサポートしようと思いつているからだ。美術コレクターのT氏はボランティアとして公開審査後の搬出作業を手伝っていたのにも東京ではありえないことであり、市民参画度で脱帽する。若い女性作家の父親が搬出作業に来て、作品を担いで帰っていったことも家族の理解と愛情を感じて感激した場面である。

つくづく高知は幸せな町だと思う。高知市文化プラザ「かるぽーと」市民ギャラリーは天井も高く、この高質の展示空間は日本で数本の指に入るであろうし、若手作家は三十五歳まで毎年出品・展示できる。願わくは、出品作家の作品を目にした企業や美術愛好家が作品を購入し、会社のロビーやウィンドウに常設展示し、作家を経済的にサポートする支援活動が定着できればと思う。

また、作家も毎年漠然と出品を続けることだけでなく、「シエル美術賞展」などの大都市の公募展にチャレンジし、自分の作品を美術市場に露出させコレクターを見つけ、美術館のグループ展に招待されるようにマネジメントしなければならぬ。独りよがりではなく、恩師、家族、友人の意見にも耳を

の熱い情熱を期待し、対決に臨んだ。私は自然体で接していたし、緊張している作家には「自然体どうぞ」と答えた。作家からのセルフ・ステイメントは皆真剣で、長々とコンセプトを伝える作家もいれば、短く制作者の叫びを囁く作家もいた。

「お金がなくて大きいキャンバスが買えなかった」という声には心が痛んだ。私は先輩美術評論家の「美術批評は上品でなければならぬ」という言葉を脳裏に浮かべながら、作品の良い所を見つけ、褒めることを心がけた。長い交友関係があつて信頼を築いて「打たれ強さ」がある友人には、時には厳しい叱責も必要であるが、初対面の若手作家には、まず欠点を指摘するよりも長所を伸ばして欲しいと願ったからだ。

十八歳から三十四歳までの出品者間には技量の差は歴然と存在していた。実力は年齢に比例するものではない。様々な展覧会に出品し続けて技量を磨き、個性を伴った作品の完成度が高く、独り立ち

傾け、自分の作品が社会の中で認知され、作家としての使命を果たすことができるようになって欲しい。最後に、若手作家の育成を真摯に願っている高知市文化振興事業団の担当者の皆様、広報活動を担っている高知新聞社の学芸部記者、若手作家を指導している高知大学の先生方、そしてボランティアで支える応援団の皆様、また作家たちの熱い思いを支えるご家族の皆様、夢と希望の実現を目指す若き作家の皆様のご多幸と「美術作品コンクール」の今後のご発展を祈念し、筆を擱く。

いがらし まさる

一九六一年 茨城県土浦市生まれ
セゾン美術館で学芸員を務め、
一九九一年ACC、花王芸術科学財団、スミノニアン研究所の助成を受け、ニューヨーク近代美術館、ブルックリン美術館、国立アメリカ美術館、ハーシユホーン美術館で研究員。NY市立大学院博士課程を経てメトロポリタン美術館講師。一九九九年より損保ジャパン東郷青児美術館学芸課長・美術評論家。

ができるレベルに到達している作家も何人もいた。私が興味をそそられた作家はその次のレベルの作家で、ある程度の実績があり、まだまだ「伸び代」があり将来の展望が期待できる作家たちである。一方、二十代前半で優れた才能の片鱗が垣間見られる作家も数名いたが、これらの作家たちは、数年後に必ずや受賞されるものと信じているので今回の受賞対象からは外した。

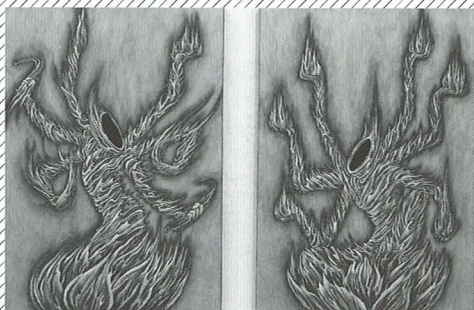
最優秀賞を受賞した土方佐代香さんの「Night scene」は、サイゴンと高知の景色を合成し、日常生活の中で輝く一瞬の煌めきを捉えて、見るものに幸福感を与えることに成功している。私が宿泊したホテルの展望レストランで見た山に囲まれた高知市の美しさとも二重写しになった。優秀賞の井関さおりさんの作品は、とにかく個性が飛びぬけて強くインパクトがあり、長年出品し続けたその努力を認めた。優秀賞の谷志穂さんの「電車通り」も素材で良かつ

たが、「海鳴り」に私の心は釘付けになった。ピンク色の波が左右に分かれて上昇し、雲になって空に舞い上がっていく構想力と淡い色彩が醸し出す、なんとも言えない感覚的で神秘的な至福の世界。マーク・ロスコをも連想させる感情の高まりを与えてくれた。是非書齋に飾りたい一品である。

公開審査の前夜、事務局、高知新聞社、高知大学、高知県立美術館、美術コレクターの方々（美術作品コンクールの応援団の皆様）とお食事をして、応援団の皆様が若手作家を支援したいという温かい思いを伺い、高知は幸せな町だなあと思いを強くした。大都会ではバラバラになっている人的ネットワークが、ここでは、県、市、マスコミ、大学、市民愛好家が協力し合って、



「Night scene」 土方 佐代香



「sister archetype engine (火をもたらず姉妹・動)」
「sister archetype engine (火をもたらず姉妹・静)」
井関 さおり



「海鳴り」 谷 志穂

第7回美術作品コンクール 受賞作品

■ 最優秀賞

■ 優秀賞

「いづる」とヤマアラシジレンマ

夏目漱石の「こころ」は、近代日本文学史上屈指の名作である。この作品の山場は、多くの高校教科書に載せられている。

私は、山場の部分だけでなく、長編小説「こころ」の全文読破を夏休みの宿題にしているのだが、反応はかんばしくない。「古すぎる」「ぴんとこない」「なぜKや先生が自殺したのかわからない」といった感想が多い。

現代の高校生の感覚からすると、昔のモノクロ映画の「名作」を、強引に見せられたような気分なのだろう。

ところが、あるキーワードを使って作品を読み解き始めると、さっと生徒たちの表情が変わる。そして授業に身を乗り出してくる。

魔法のキーワードは「ヤマアラシジレンマ」である。哲学者ショーペンハウアーの「随想録」中の寓話から生まれた言葉だ。

Kが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったのです……

なぜ先生は、Kの存在を忘れていられるのか。それは、Kが先生にとって、他者ではなく、自己の一部であるからだ。自己の身体の内存在は、ふだんは忘れていく。

文字通り二人は「一心同体」なのである。これは、日本人が近代以前から引きずってきた特殊日本人な人間関係である。

この関係を「甘えの構造」と名付けて考察したのは精神科医の土居健郎氏だが、漱石はそのほるか以前から日本人のこの心的傾向を意識していた。——日本の「開花」（近代化）はゆがんでいる。外面的、制度的な「上滑り」の近代化には成功したが、日本人は内面的には前近代のままであるというのが漱石の基本認識である。（講演「現代日本の開花」）

——から、どちらかが自立しようとする、それは他方にとっては痛烈な「裏切り」と感じられる。その葛藤が、「ヤマアラシジレンマ」だ。相手の中に発見した「他者性」がヤマアラシのトゲとなってお互いを深く傷つけるのである。

ある日Kは、突然先生の部屋に入ってきて、自分はお嬢さんを愛して

冬の寒い日に会った二匹の孤独なヤマアラシが、体を温め合うために抱き合って一つになろうとする。

ところが、抱き合ったとたん激痛を感じて飛びさがる。お互いに最も無防備な柔らかい肉をさらしたところを、お互いの鋭いトゲで指し貫かれたからだ。二匹は激しく憎み合う。

ところが、どちらも孤独な淋しいヤマアラシであるため、同じ抱擁を二度、三度と繰り返ししてしまう。この手ひどい経験を繰り返すうち、二匹のヤマアラシはやがて適切な距離をとることを学習する、という寓話である。

ところで、二匹が一体化することに固執するあまり、抱擁を無限に繰り返したらどうなるだろう。おそらく二匹のヤマアラシは出血多量で死ぬだろう。

「こころ」は、一人の女性をめぐる、二人の男が死ぬ——それも自殺するという凄惨な物語だ。

いるという告白をする。

先生は衝撃を受ける。先生の目から見ると、お嬢さんは自分ではなくてKを愛している。それでも先生がかりうじて心の平穏を保っていられたのは、Kの方はお嬢さん——というより女性一般——に対して全く関心を持っていないと確信していたからだ。Kは学問一筋の人物である。

ところが、Kの方もお嬢さんを愛しているのなら、二人は相思相愛だということになる。先生の思いこみの中で、二人が結ばれるのは時間の問題であり、先生がお嬢さんと結婚する可能性は絶たれたことになる。

注目すべきは、Kの告白を聞いたあとの先生の心の動きである。「私にはだいたい彼が解しがたい男のように見えました。どうしてあんなことを突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けないか、それはないほどに、彼の恋が募ってきたのか、すべて私には解しにくい問題でした。」

「これから先彼を相手にするのが変に気味が悪かったです。……私には彼（K）が一種の魔物のように思えたからでしょう。」

一心同体であった親友Kが、突然「解しがたい男」になり、「魔物」のように見えてくる。これがヤマアラシジレンマである。

二人の男——先生（と呼ばれる主人公）と親友のKが巻き込まれた葛藤こそ、ヤマアラシジレンマである。多くの高校生は類似のジレンマを友人間や家族との間で経験し、深く傷ついた経験を持っている。彼らが「こころ」の世界へ身を乗り出してくるのはそのせいである。

先生と親友Kは、下宿先のお嬢さんを同時に愛し、それゆえに葛藤する。先生は、自分がお嬢さんを愛していることを隠して、Kに恋の断念を迫る。そしてKを出し抜いてお嬢さんと婚約する。その事実を知った直後にKは自殺する。先生は深い罪の意識を感じて苦悩する。

後になって先生は、自分を師と慕う若者（「こころ」の語り手）宛に長い遺書を書き、この出来事の詳細を告白して、自ら命を絶つのである。教科書に掲載されているのは、「先生の遺書」の後半部分だ。

先生とKは強い「一体感」によって結ばれていた。「山で生け捕られた動物が、檻の中で抱き合いながら、外をにらめるようなものでしたろう。……と書かれています。この動物がヤマアラシであったと考えれば、二人の関係は読み解くことができる。

お互いがお互いを自己の一部とみなしているため、相手が自分に都合の悪い心情を持つ可能性が想像できない。だからいったん相手が「自己の一部」ではありえない言動に出ると、「魔物化した」と感じる。そして「裏切られた」という強烈な被害感情を持つ。

同じことはKの側からも言える。先生にお嬢さんへの恋心を告白したKだが、先生のお嬢さんに対する想いには全く気づかない。先生はこう書いている。

「……私は苦しくつてたまりませんでした。おそらくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上にはつきりした字で張り付けられてあったろうと私は思うのです。」

Kは、先生の顔の明白な変化に気づかなかつた。Kにとって先生は他者ではなく、自己の一部と認識されていたからだ。「自己の一部」には気を使う必要がない。

つまり先生とKは、相手が他者であることが認められない関係なのだ。相手の「他者性」が「ヤマアラシのトゲ」となってお互いを刺す、実はきわめて危険な関係だったのである。

こうして始まった恐るべきヤマアラシジレンマは、最終的に二人の悲劇的な死をもって終わる。先生の遺書を読み終えた若者（語

大学生である先生とKは、同じ下宿でふすま一枚をへだてて暮らしていた。二人は幼なじみで、一心同体と言っているほどに仲がよい。「お前のものは俺のもの。俺のものはお前のもの。」そのままの関係である。Kの下宿代は先生が出しているのだが、Kは大きい顔をして暮らしている。「お前のものは俺のもの。」だからである。

一方先生は、大学から帰るとKの部屋を通り道にして自分の部屋に入る。Kにはプライベートがいない。しかしKは平気である。「俺のものはお前のもの。」だからである。

二人は、難解な哲学論議はするが、普通の「おしゃべり」はあまりしない。次のような記述がある。

「……私（先生）は無意識においと声を掛けました。すると向こうでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。」

「……私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも依前と同じような調子で、おいと答えました。」

「おい」という言葉だけでコミュニケーションが成立するのである。次のような表現もある。

「ふだんもこんなふうにお互いが仕切り一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あったのですが、私は（語り手）が、先生の投げたボールをどう受け止め、その後どう生きていったかは描かれていない。このボール——「近代日本人の心の闇」という問題は、先生から若者を通して読者に向かつて投げられたものである。」

先生もKも、近代と前近代の間で引き裂かれた存在だった。上半身は近代人だが、下半身は前近代人なのである。意識的には近代的な自我を確立しようとしながら、無意識的には前近代的な一体感——甘えの関係——を求めている。この矛盾から、予期せざる葛藤に巻き込まれたのである。

近代と前近代。自立と甘え。両者の矛盾は、現代の日本人にとってもリアルな問題である。漱石の言葉を借りて言えば、「外発的な開花」には成功しても、「内発的な開花」を経験していない日本人は、現在もこの構図の中で呻吟している。「こころ」が投げかける問題は深くして新しいのである。

ひろい まもる

一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

ラス部、土佐中学高等学校吹奏楽部、鏡野吹奏楽団の四団体に出演して頂きました。

また、最後には恒例となった全出演者二百七十名による合同演奏が行われました。通常より張り出してセットされた舞台一杯のメンバーによる演奏は、とても迫力のあるものでした。

五百七十一名の方に入場して頂き、アンケートでも、「全国レベルの合唱と吹奏楽両方聴くことができた」「どの団体もそれぞれ工夫を凝らし、かつレベルが高く素晴しかったです。感動しました」「まさにミュージックストリーム。楽しい年末の音楽会がありました」「まさにミュージックストリーム。楽しい年末の音楽会をありがとうございました！特に最後の合同演奏は素晴らしかったです」など、大変好評の声を頂きました。



第八回目となった「ミュージック・ストリーム2011」をクリスマススマイルにつつまれた昨年十二月二十三日（金）午後二時より、かるぽーと大ホールで開催しました。これは高知や四国を代表して全国大会に出場した音楽団体の、レベルの高い演奏・合唱を県民の皆様に向けて頂くというコンサートです。

今回は、高知学芸中学高等学校コーラス部、土佐女子中学高等学校コーラス部、土佐中学高等学校吹奏楽部、鏡野吹奏楽団の四団体に出演して頂きました。

ミュージック・ストリーム2011

World Music Journey vol.5 「アメリカン・ルーツ・ミュージック」

その源流から拡がりへへ

二月四日（土）小ホールにて、「国際的な音楽交流を中心に高知を楽しくするプロジェクト」との共催による、音楽にまつわる話を演奏を交えてお届けするレクチャープログラム、「ワールドミュージックジャーニー」の第五弾を開催しました。

今回は、ジョン万次郎がいた十九世紀のアメリカはどんな国だったのか？ その後世界の音楽をリードすることになるアメリカン・ミュージックのルーツをテーマに、音楽評論家のピーター・バラカンさん、ブルーグラス専門月刊誌『ムーンシャイナ』編集長の渡辺三郎さん、アコースティック弦楽器の達人であり、洗足学園音楽大学ジャズコース・ギター講師でもある有田純弘さんをお招きして開催しました。

- ジョン万とフォスターの時代
- フロントティアと産業革命そしてバブル
- Great Awakening 信仰リバイバル
- 二十世紀 ブルースの誕生（一九〇二）以降、現在の音楽へと

という、それぞれに深いテーマを二時間ほどで、演奏を交えながら駆け足で進んでいくという流れになりました。

演奏は三人の他にも、高知からそれぞれテーマに見合ったミュージシャン五組（アースデイズ・シンガーズ、樹奈、スイング・サム、山崎真幹、ロンギング・フォー・ザ・サウスランド）が加わり、バラエティ豊かなステージとなりました。

また、公演当日の朝、ピーター・バラカンさんがDJを務めるラジオ番組で本公演の簡単な内容紹介をさせていただいたのですが、その番組のリスナーに、ジョン万次郎さんの子孫の方がいらつしやう、会場にメッセージと、ジョン万次郎さんが残した英詩を届けていたというサプライズが！

予想外のプレゼントに、出演者、スタッフ、そして来場された方々も、今回のテーマが決して自分たちと関係のない話ではなく、脈々と現在に続く歴史であると実感しました。

鎮守の森は今

県内の神社めぐり体験記（二）



竹内 荘市

神社巡りは、その目的によって次のようにいろいろな方法がある。

一、お祭りを見るのが目的の場合。県内各地には有名な神祭が沢山ある。それを見てまわる人をよく見かける。写真が趣味の方に多いようだ。

二、有名な神社に的を絞って見る場合。

終戦までは、神社には今はなき社格制度があった。旧県社、旧郷社、旧村社などの神社は今でも立派なものが多い。その他に由緒ある神社を含めて見る方法である。

三、特定の神社に的を絞る場合。

○神社とか△△神宮というように、神社を特定する場合と、特定の祭神を祀る神社に絞って見る方法で、これは学者や信仰心の厚い方にみられる。

四、神社の一部分を見るのを目的とする場合。

これは稀なケースである。例えば神殿の建築様式だったり、狛犬のみが目的だったり、これもまた楽しいような神社巡りである。

五、全ての神社を見る場合。

神社の大小や有名無名、また種類に関係なく、神社と名が付けば全てを見る場合。

だが、実はこれが一番大変なのである。有名な神社や大きな神社は比較的に見つけやすい。ところが小さな神社、密やかに祀られている神社、山中にあって忘れられがちな神社などは、地図や資料にも載っておらず、探すのに大変苦労するのである。

神社巡りは、どんな場合でも事前の準備が欠かせない。私は次のような準備をしてとりかかった。

まず第一に、地図の入手である。地図もいろいろあるが、各市町村役場が現在使用している行政地図である。これには神社そのものはごく一部しか載っていないが、各集落名と道路が載っているからである。県内の五十七市町村（合併前）に出向き、有料で分けてもらった。

次は、各市町村が発行している市町村史の閲覧である。この中の宗教に関する項目をコピーする。これは役場によって記載内容に濃淡のばらつきがあるもの大いに参考となる。

さらに高知県神社明細帳がある。これは明治の初め頃に県が各村に指示して神社の届け出をさせて取りまとめたものである。古くて現状とは一致しない場合もあるが、祭神や由緒等の記載があり、神社巡りには欠かせない資料である。

その他にも、神社に関する本や新聞等も参考にしながら、カメラを持っていざ現地へ出向くのである。子供が遠足に行くように嬉しそうなど、

妻にからかわれながら家を出たものである。

神社巡りで最も大変なのは、神社の在り処を探すことだ。地域の人に訊ねるのが最良だが、なかなか人に会わない。過疎で空家が多い。既に住人のいなくなった集落跡もある。耕作放棄地や小学校の廃校跡が印象的だ。

地図を片手に神社を探す。畑で仕事のおばさんが、わざわざ神社まで案内して下さったり、田んぼで仕事のおじさんが、自分が履いていた長クツを抜いて貸してくれたこともあった。野菜の差し入れや、コーヒーをご馳走して下さるなど、県内のどこへ行っても親切な人がいる。

その反面、何しに来た。何故そんなことする。お賽銭を盗られたことがある。不審な人を見かけたら警察へ知らせと言われている等々、疑いを掛けられたことも何度かあった。

人に出会える方はまだ良い。あるはずの神社が見つからず、同じ所へ何度も出かけることがある。でも、無駄足とは思わず新たな発見を楽しみに何度でも足を運ぶのである。

たけうち そういち

一九三八年 高岡郡四万十町生まれ
専修大学法学部卒業。高知宮林局（特）損害保険料率算出機構高知調査事務所（社）日本損害保険協会高知相談センター等に勤務。

第64回高知市展 関連行事

楽しい切り絵講座

市民の美術の広場「高知市展」が今年も5月～6月にかかるぼーとで開催されます。その関連行事として、市展デザイン専門部会による切り絵の講習会を開きます。

下絵を準備するので、初めての方も気軽に参加できます。切り絵に挑戦してみませんか？

- 対象 16歳以上の方ならどなたでも！
- 日程 ①4月15日(日) ②21日(土) ③22日(日)
10:30～12:00 (全3回)
- 会場 高知市文化プラザかるぼーと 9階 第3学習室
- 参加費 3,000円 (材料費含む)
- 定員 20名

お申し込み・お問い合わせ

(財)高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071
3月15日(木) 8:30より電話で受け付け

主催 高知市展デザイン専門部会・(財)高知市文化振興事業団

風伯

お片づけの魔法

はいらないと考えた。その携帯電話もスマートフォンに変えた。それで、自宅のネット回線もほとんど不要になり、これも解約してしまっただ。これがもつと決心のいることだった。新聞の定期購読も止めた。一カ月のゴミがずいぶん減ったし、自分ぐらいの年齢になると、冠婚葬祭の義理など欠い

この半年、環境を少しずつ変えている。まず固定電話を止めた。なにかのときに信用度が違うように耳にしたが、いつ来るか分からない「なにかのとき」のために、酔っ払いの間違い電話しかかからなくなった電話を引いておく意味がなくなったからだ。携帯電話で十分だし、それで信用してもらえないなら、そんな信用

ても何事も起こらないだろうと考えた。必要不可欠なことは、新聞の助けがなくとも耳に入ってくる。新聞で得られる情報は、ほとんどインターネットで収集できるし、いまネット上で安価な新聞を購読している。解説が欲しければブログでいくらでも得られる。ベストセラーの「人生がときめく片づけの魔法」を読んで、「ときめかない」といつか読むかもしれない本や、ついおいておいたモノをどんどん処分した。そうすると部屋もすっきりするが、なによりも心に引がかかっていたさまざまなことがなくなり自分を愛おしむ気持ちが起こってくるから不思議だ。ちなみにこれは「お片づけ」のハウツー本ではなく、私は「人生哲学」の本だとさえ思う。ずいぶん前、いつのころから義理の付き合いを止めた。そのころから損をすることがあったかも知れないが、その代わり自由な時間を得ることができた。身の回りを整理して後悔したことはない。(株)

第28回 写真コンテスト

「高知を撮る」 入選作品展

「記録写真部門」と「LOVE 高知部門」にご応募いただきました約300点の作品の中から、特選4点、準特選20点を含む入選作品約70点を展示します。今回は「記録写真部門」について、新たに【平成の部】と【昭和以前の部】を設け2部に分けて募集しました。撮影時期で区切るにより、写真の記録性がより際立つ作品展となっております。

日時：

2012.3.20(火)～25(日)
AM10:00～PM5:00
※20日午前10時より表彰式を行います。

会場：

高知市文化プラザかるぼーと
7階市民ギャラリー・第4展示室

主催：(財)高知市文化振興事業団
後援：株式会社ラボネットワーク
お問い合わせ：
(財)高知市文化振興事業団
TEL：088-883-5071

入場無料

今号の表紙

「芽吹きのはじまり」

大畠 菜摘

三月といえば、冬が終わり春になって暖かくなり、植物が新しい芽を出す時期なので花を描きました。くっきりした線で描かないことで、やわらかい雰囲気仕上げました。

(おおばたけ なつみ/
国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)



高知を撮る

ひな祭り

北村 健三

室内より外が少し暗くなる時間帯をねらって撮影しました。

第27回写真コンテスト入賞作品 (平成22年2月 四万十町大正)

豊かな国のはずなのに何か息苦しい。世界第二の経済大国、今は第三位の国といわれながら、年収二百万円以下の人が一千万人もいる。ひどい格差の国である。さらに年間三万人余りの人が自殺に追い込まれていると聞くと、ただただ心が痛む。毎日三食腹いっぱい食べ、どの家庭も洗濯機に冷蔵庫、カラーテレビを持ち、九割がエアコン、八割が自動車、そして十人に一人が毎年海外旅行をするのが日本の現状といわれながら、その陰にこうした人が多くいることを忘れてはならない。政治の閉塞感も深刻である。期待された政権交代も高揚感を持って迎えられたのはほんのひと時で、首相交代を繰り返しても展望は開けず、国民の政治不信は嫌悪感さえ伴ってふくらむばかりだ。東日本大震災の復興や福島第一原発事故処理も、手際の上では全く見られず、米軍普天間基地移設問題も八方ふさがりのままである。

豊かさの翳り



風俗歳時記

日本が民主主義の国になって六十数年経つが、本意に「主権在民」を実現する国になっっているか。(株)

国民が政治を動かしている。民主国家の主体は国民なのだ。われわれもサイレントマジョリティーであってはならない。日本が民主主義の国になって六十数年経つが、本意に「主権在民」を実現する国になっっているか。でもそも政治とはなんなのか。政治は国民に希望を与え、生活と福祉を守り、人々を幸せにするためのものではなかったか。真面目に働き生活しているものが、本当に幸せにされない国が、立派な国といえるのか。もっと国民の声が政治に届くようにしなくてはならない。欧米や中東の動きを見ても、

やたら熱心なのは、国民生活を圧迫しかねない消費税率上げと、食料と農業・国民生活の将来に不安いっっぱいのTPP(環太平洋連携協定)の参加である。もっと急いでやるべきことが他に沢山あるだろうという国民の声は、無視されたままである。いっただいこの国はどうなっているのか。

高知市文化プラザかるぽーと開館10周年記念事業

gala ガラ・コンサート
concert

ふるさとに贈る珠玉の歌声

～オペラ・アリアから日本の名曲まで～



ソプラノ/光岡暁恵
Photo by Flavio Galfozzi

メゾソプラノ/山崎智世

テノール/所谷直生

バリトン/和下田大典

ピアノ/濱口典子

平成24年4月15日

14時開演(13時30分開場)

高知市文化プラザかるぽーと大ホール

目 録

- 歌劇「ロメオとジュリエット」より「私は夢に生きたい」 グノー作曲
- 歌劇「カルメン」より「花の歌」 ビゼー作曲
- 「さびしいカシの木」 やなせたかし作詞/木下牧子作曲
- 「ゆりかご」 平井康三郎作詞/作曲
- 「オー・ソレ・ミオ」 ディ・カピア作曲
- 「手のひらを太陽に」 やなせたかし作詞/いずみたく作曲
- 「ひまわりの家の輪舞曲」 宮崎駿作詞/久石譲作曲(「崖の上のポニョ」より) 他

※都合により曲目は変更する場合がございます。

入場料 前売り 一般 2,500円(1,750円) 大学生以下 1,000円(700円)
 当日 3,000円(2,100円) 1,500円(1,050円)

※全席自由 ※未就学児は入場できません。
 ※()内は、身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者、あるいはその介護者1名の料金。

チケット発売所

高知市文化プラザミュージアムショップ 088-883-5052 高知県民文化ホール 088-824-5321
 高知プレイガイド 088-825-4335 高知県立美術館ミュージアムショップ 088-866-8118
 高知大丸プレイガイド 088-825-2191 ローソンチケット Lコード: 68360

主 催 (財)高知市文化振興事業団・RKC高知放送
 共 催 高知市文化プラザ共同企業体
 後 援 高知市教育委員会・高知新聞社・朝日新聞高知総局・毎日新聞高知支局・読売新聞高知支局・エフエム高知
 お問い合わせ (財)高知市文化振興事業団 TEL 088-883-5071 <http://www.bunkaplaza.or.jp>

高知から中央へ大きく羽ばたき活躍している高知県出身のアーティストを迎え、かるぽーとが贈る華やかなガラ(祝賀)コンサート。皆さま、ぜひお誘いあわせの上ご来場いただき、心豊かなひとときをお過ごしください。



高知市文化プラザ
かるぽーと
 〒780-8529 高知市丸反田2-1

託児サービスの案内

託児をご希望の方は、生後6カ月のお子様より特別室(無料)をご利用いただけますので、事前にご予約ください。なお、定例に連し次期予約からさせていただきます。

高知市文化プラザ	088-883-5052
高知市丸反田2-1	
高知市文化プラザ	088-883-5052
高知市丸反田2-1	
高知市文化プラザ	088-883-5052
高知市丸反田2-1	
高知市文化プラザ	088-883-5052
高知市丸反田2-1	